

琉球文化圏に伝世する刺繍品

－仲村家所有刺繍大袖衣－

寺田 貴子

Embroidery textiles found in the area of Ryukyu:
embroidered costume of Nakamura family

Takako Terada

The southwest islands of Japan that we call Okinawa today were once called Ryukyu. The Ryukyu kingdom was an independent kingdom from the 15th century to the 19th century, played a central role in the maritime trade networks of medieval China, Korea, Japan and Southeast Asia, and had a unique culture its own.

This research has been carried out for the purpose of clarifying a characteristic of embroidered costume which remained in Nakamura family in the northern part of Okinawa Island.

1. はじめに

15世紀から19世紀の琉球文化圏においては、中継貿易によって入り込む諸外国のさまざまな文化の影響を受けつつ、琉球王国独自の文化が築かれていた。衣生活分野では、紅型、緋、花織などの染織技術のほか、琉服、琉縫い、琉装と称する服飾の独特な構成様式があった。

琉球文化圏の染織や服飾の特徴については、多方面からの調査研究がなされ、報告や書籍も多いが、筆者は、2007年秋に開館した沖縄県立博物館・美術館の常設展示品「琉球神女衣装」の刺繍を担当したことを契機にして、琉球服飾研究者の植木ちか子氏（前国際服飾学会理事）より、琉球の刺繍については未調査な部分が残っていることを知らされた。その後、植木氏の協力のもと、沖縄本島、奄美大島、沖永良部島、伊是名島、久米島などでの調査を進めるとともに、刺繍品の再現にも取り組むことで、琉球独自の刺繍技法が認められることに着目してきた¹⁻⁴⁾。

沖縄本島北部の仲村家には数種の刺繍品が伝世しており、その中の「鳳凰文様刺繍裂残欠」と「カイチ様文様刺繍裂残欠」の特徴についてはすでに報告した²⁾。本報告では、仲村家が所有する総刺繍大袖衣に施されている刺繍の特徴について、調査と再現作業をとおして得た知見を述べる。

2. 仲村家所有刺繍大袖衣

2.1 来歴と形状

仲村家は沖縄県国頭郡本部町嘉津宇にある旧家で、所有する大袖衣（以下、「本資料」と略記）とは、緑色の平織の絹地全体にさまざまな植物文様などが刺繍された琉服で（図1～3）、その寸法を表1に示す。衿肩周り、袖山、前身頃の左膝部分および右衽裾に欠損が認められるものの、一領のほぼ完全な大袖衣の状態である。当家では、神女・阿応理屋恵按司（あおりやえ／オーレーあじ）の礼服とも、北山滅亡の際に当家に隠遁して世を避けた貴族の衣装とも言われ^{3,4)}、毎年「七夕」のときに虫干しをする以外は櫃から出してはならないのを守り、伝えてきた。ここで、神女（祝女、ノロ）とは、沖縄・奄美群島で地域の祭祀を司る女性司祭のことである。

表1. 仲村家所有刺繍大袖衣の寸法 (単位cm)

衿 92	袖幅 46	肩幅 46	後幅 46	前幅 45
衿幅 30	衿幅 14	身丈 150	袖丈 71	衿下 25



図1. 仲村家所有刺繍大袖衣 (背面)



図2. 仲村家所有刺繍大袖衣 (左前面)



図3. 仲村家所有刺繍大袖衣（右前面）

2.2 文様の特徴

本資料の文様には、笹、桔梗、橘、梅、桜などの植物文様や、植物と州浜とを組み合わせた文様があり、それらが衣装全体に余すところなく配置されている。植物文様には唐草文様（蕨手）を含めて24種類あり、文様の名称が明確なものと、花唐草や宝相華のようなアレンジされたものがみられる。州浜文様は7種類あり、その配置には規則性が認められる。州浜文様の内側には、寿山福海、貝類（巻貝、二枚貝）、流水などの文様が配置されている。特に、右手の前袖下の桐・州浜文様は（図4）、他所には配置されていない唯一の文様である。



図4. 仲村家所有刺繍大袖衣の桐・州浜文様

本資料に用いられているそれぞれの文様は、めでたさや富貴などを象徴する吉祥文様である⁵⁾。各文様の意味については割愛するが、数多くの吉祥文様の組み合わせと、すべての文様を刺繍のみで表現していることは、来歴が明らかでない本資料を考証する上で貴重な示唆を与える。

本資料をもとにして、刺繍の再現に向けて筆者が作成した下絵を図5～7に示す。衣装全体には241の図柄があるが、まったく同じ図案がみられないことから、文様は型紙などを用いて配置されたのではなく、手描きで自由にアレンジされたものと考えられる。

本資料の文様の向きには明確な天地・上下があり、袖山、身頃の肩、衿の中央で折り返って、上向きに配置されている。また、背縫い部分にのみ、縫い目をわたって文様が配置されるという「絵羽」付けがみられる。このことから、縫製の前に刺繍が行われたことが推察できる。しかし、絵羽部分の柄のつながりはややあいまいで、文様を連続させることへの厳密さはみられない。袖付けや衿付けなどには絵羽付けはみられず、背縫い部分以外の文様は、すべて縫い目線の手前までで完結している。

州浜文様と植物文様とを組み合わせる表現技法は、伊是名島の名嘉家が所有する総刺繍の大袖衣(以下、「名嘉家資料」と略記)にもみられるが、名嘉家資料の文様は本資料よりも大きく、配置も衣装全体に大胆になされており、衿中央の文様は、着用時に背中心で上向きになっている。なお、名嘉家資料とは、前述の沖縄県立博物館・美術館展示品の「琉球神女衣装」のモデルとなったもので¹⁾、神女・伊平屋阿母加那志(いへやあむかなし)が、彼女の弟である尚円王から拝領したとされる総刺繍の大袖衣である。

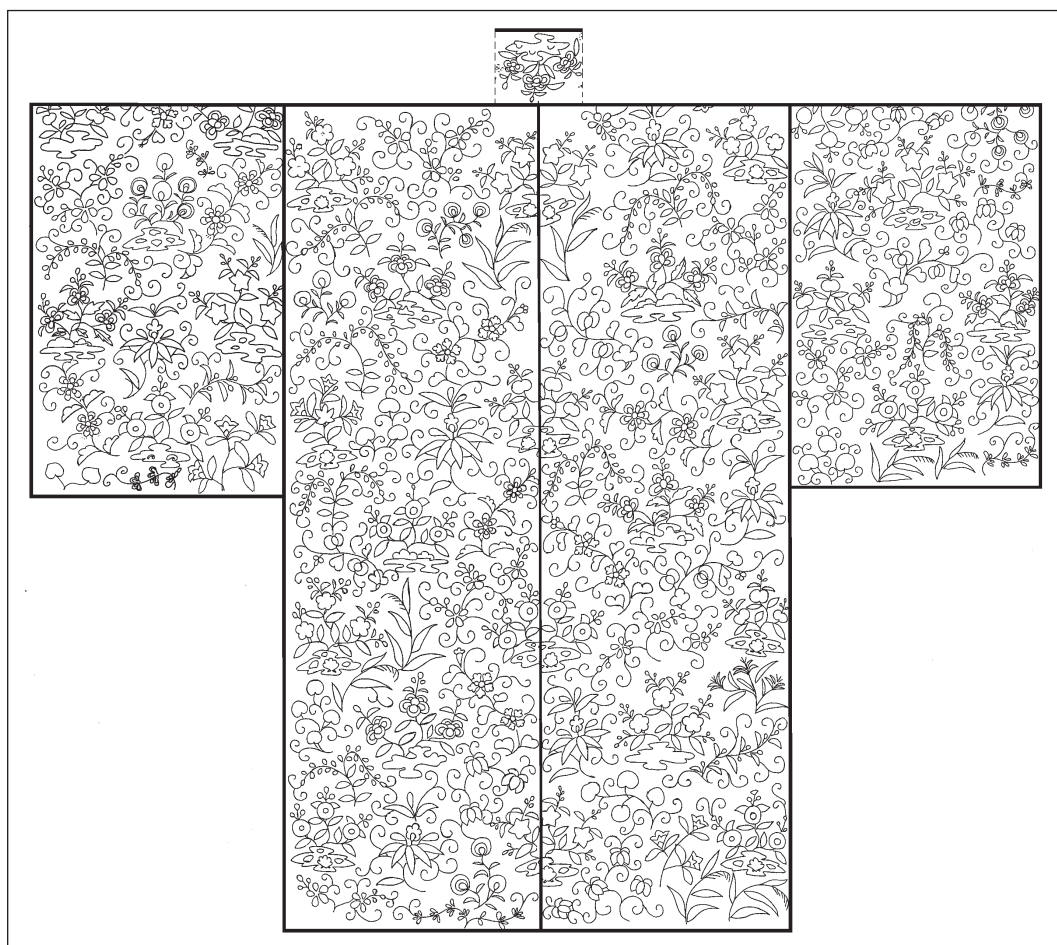


図5. 仲村家所有刺繍大袖衣の下絵(背面)



図6. 仲村家所有刺繍大袖衣の下絵 (左前面)

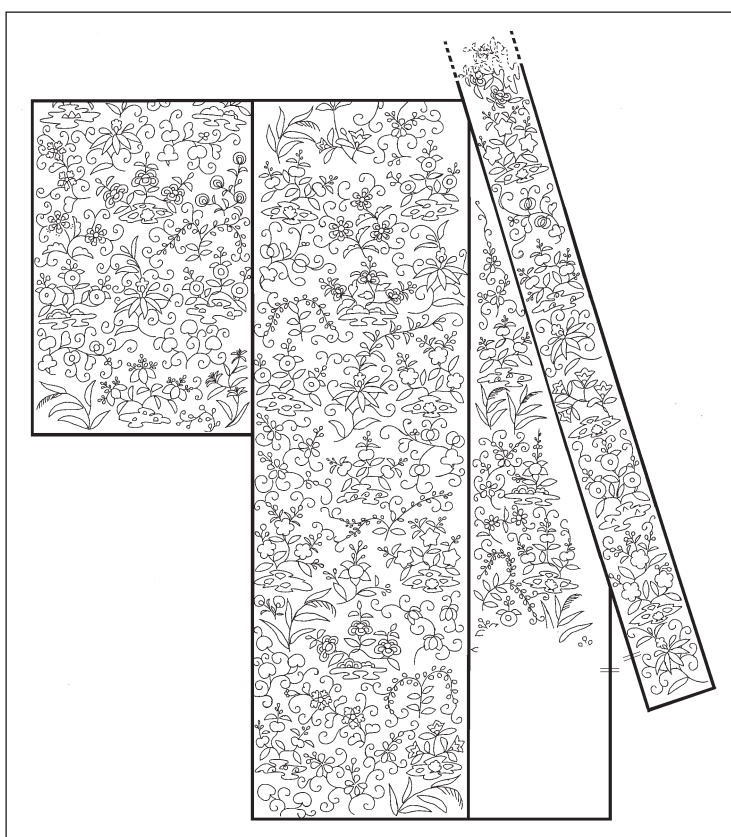


図7. 仲村家所有刺繍大袖衣の下絵 (右前面)

また、本資料は前田育徳会が所蔵する加賀前田家伝来の名物裂のうちの、中国の明時代の「花文尽裂緑絹紬地」（以下、「前田家資料」と略記）と、文様、繡い技法、色彩ともにほぼ類似している（2010年10月閲覧）。前田家資料には22種類の植物文様があり⁶⁾、州浜文様は無く、文様全体が本資料よりもやや小さいことなどが相違点としてあげられる。本資料の各文様の名称や、前田家資料との詳細な比較検討については、稿を改めて報告したい。

2.3 刺繍技法の特徴

本資料には、布地の裏側には刺繍糸が渡らないという、「渡し繡い」の技法が用いられている（図8、9）。また、図案（刺繍）の途中で「ぼかし」技法は用いずに、糸の配色を大胆に変える「色がわり」の表現が認められる（図10）。これらは、桃山時代の刺繍に特徴的にみられる表現方法である⁶⁾。このほか、本資料の刺繍技法には、たて繡いきり、斜め繡いきり、まつい繡い、押さえ繡い、葉脈かけ、しべかけなどが用いられており（図11、12）、いずれも日本刺繍で行われている技法と同様である。

「渡し繡い」は、名嘉家資料はじめその他の琉球文化圏に伝世する刺繍品にも用いられている技法である。また、名嘉家資料と前田家資料にみられた「鎖繡い」技法は、本資料にはまったく用いられていない。

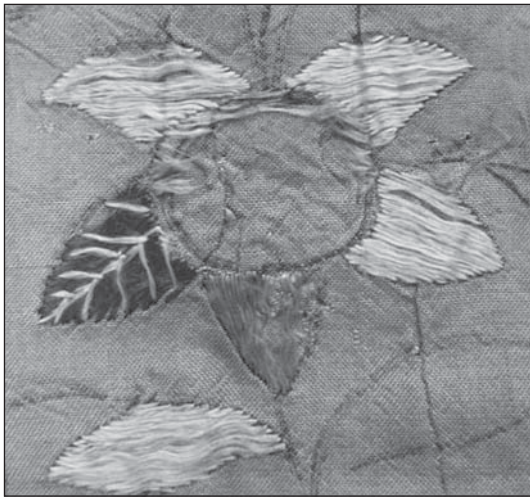


図8. 仲村家所有刺繍大袖衣の刺繍部分（表）

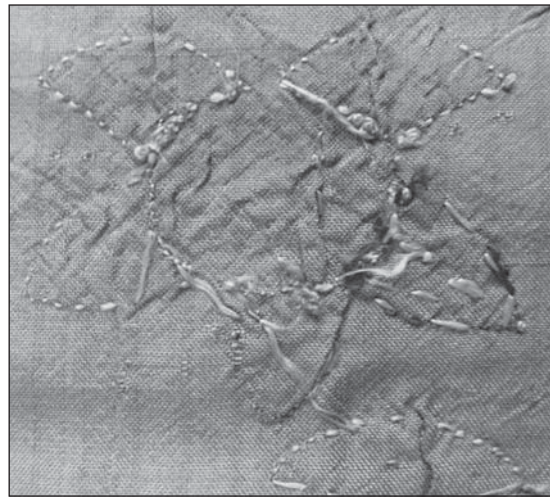


図9. 仲村家所有刺繍大袖衣の刺繍部分（裏）

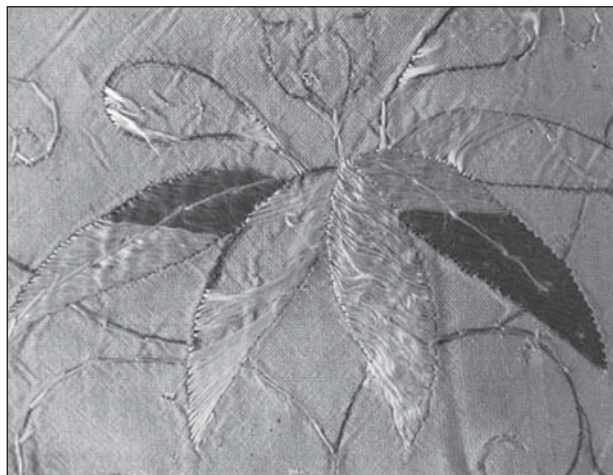


図10. 仲村家所有刺繍大袖衣の「色がわり」部分

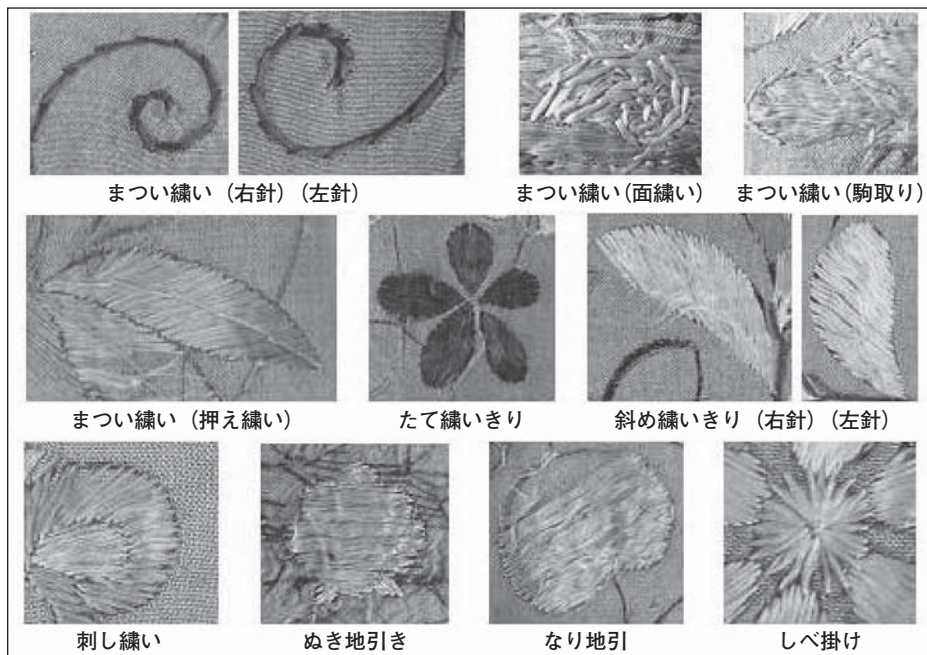


図11. 仲村家所有刺繍大袖衣の刺繍技法

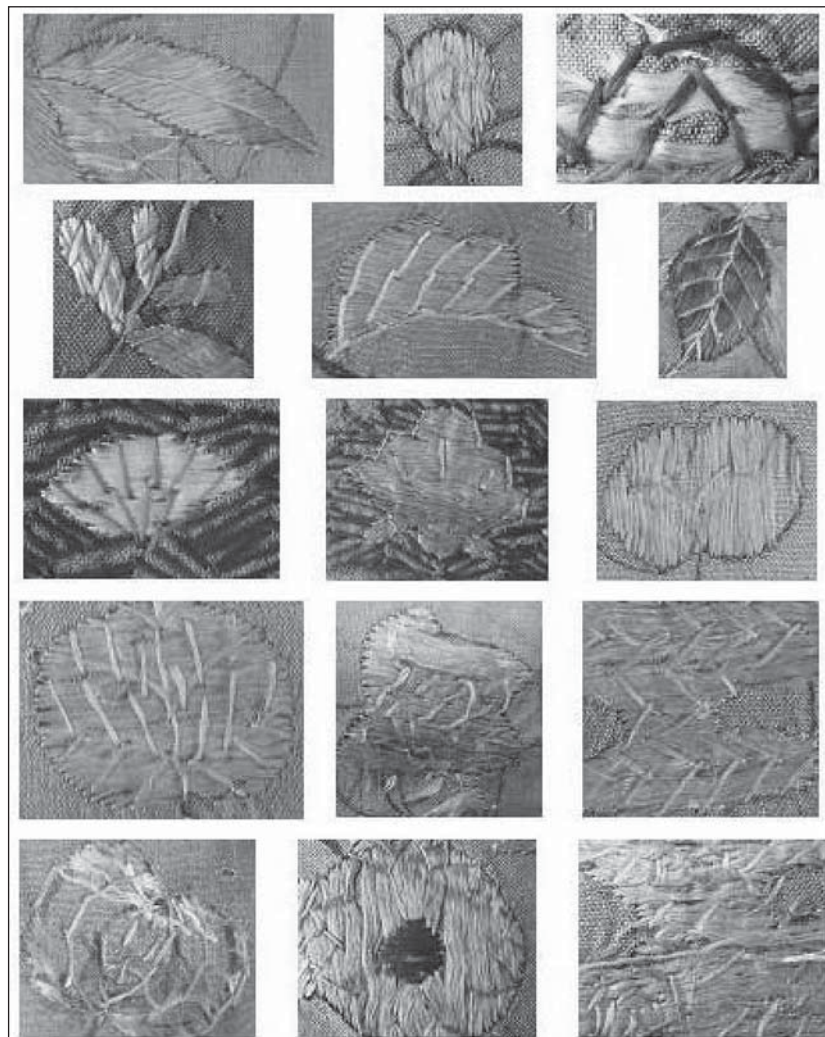


図12. 仲村家所有刺繍大袖衣の押さえ繡いのバリエーション

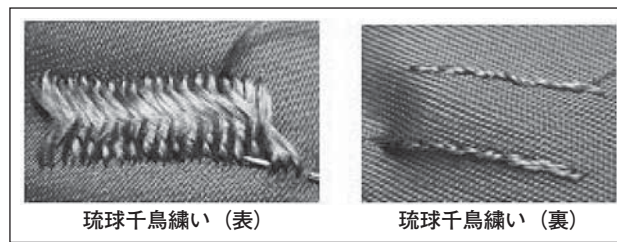


図13. 琉球千鳥織い

本資料には、仲村家が所有するその他の刺繍品の「鳳凰文様刺繍裂残欠」および「カイチ様文様刺繍裂残欠」の両方に施されている琉球千鳥織い（図13）は観察されず、通常の千鳥縫い様の技法が州浜文様や面表現部分の押さえ織いに用いられている。

ここで、琉球千鳥織いとは筆者が提唱している名称である²⁾。名嘉家資料や久米島、沖永良部島の神女衣装などに多用されている技法で、「千鳥縫い」や「ヘリンボーステッチ」をより緻密にした織い表現である。千鳥縫いは洋裁や和裁にも用いられ、ヘリンボーステッチはインドやメキシコ、グアテマラなどの伝統的な刺繍にも用いられている。

琉球千鳥織いは、琉球文化圏に伝世する刺繍品に特徴的にみられる技法で、特に、名嘉家資料や沖永良部島の森家所有の総刺繍大袖衣には、緻密な琉球千鳥織いを、さらに重ねて織っている部分がある。神女衣装の刺繍に多用されていることは、織い表現に何らかの意味がある技法であることを示唆していると思われる。

琉球には古くから「弁才天」信仰があり、最高位の神女である聞得大君の祭神ともなっている⁷⁾。弁才天は元来ヒンドゥー教の女神・サラスバティで、その符号・シンボルは逆三角形「▽」である。「琉球千鳥織い」は、糸で三角形を上下に形成させながら、無数に連続させ、重ねることができる技法であることから、弁才天信仰を表現する刺繍技法として用いられたとも考えられよう。

また、三角形をモチーフとした文様や飾りが、特に奄美大島の神女に関する資料にみられる。三角文は「鱗文」、「鋸歯文」、「山形文」とも呼ばれ、守護を願う呪術的モチーフともなっていることから、琉球千鳥織いの意味には今後とも着目し、解明いきたい。

本資料には、その「琉球千鳥織い」が用いられていないことについては、渡来品であろうか、琉球独特の神事との関わりがない衣装か、琉球千鳥織いが導入される以前のものか、あるいは、染織など他の表現技法に移行して刺繍が用いられなくなったか、などが考えられよう。

2.4 刺繍の再現

本資料の刺繍を再現するための表地（基布）は、経糸が青色で横糸は黄色の、肉眼では緑色に見える市販のシルクシャンタンを用いた。本資料と再現基布の色彩を定量的に比較するため、ミノルタ（現コニカミノルタ）製COLOR READER CR-13を用いて両基布の表面を測色し、（株）コアサイエンスの解析ソフト「彩チェックXP」を用いて色彩値と色相環（マンセルHVC）グラフを得た（図14）。両者を比較すると、再現用基布のほうがやや濃色であったものの、色相は近似していた。

刺繍の下絵は、本資料の墨描き線に似るように、更紗染めなどでも利用するカーボン紙を用いて基布に転写した。

刺繍糸は、株式会社・糸幸製日本刺繍釜糸規格染極上品の絹平糸7色を購入して用いた。色は本資料の現状に近いものを糸幸の見本帳から選んだ。それぞれの染色釜糸の色番号は、41（日本の伝統色978赤色・ししろ）、77（同767幹色・みきいろ）、78（同748金茶色・きんちゃいろ）、81（同803黄蘗色・きはだいろ）、172（同887露草色・つゆくさいろ）、290（同882山鳩色・やまぼといろ）、315（同885納戸色・なんどいろ）であった。なお、日本の伝統色の表記は、大日本インキ化学のDICカラーガイド「日本の伝統色」を用いて、筆者が目視判定したものである。刺繍糸は撚りをかけずに平糸のまま、一本どりで用いた。

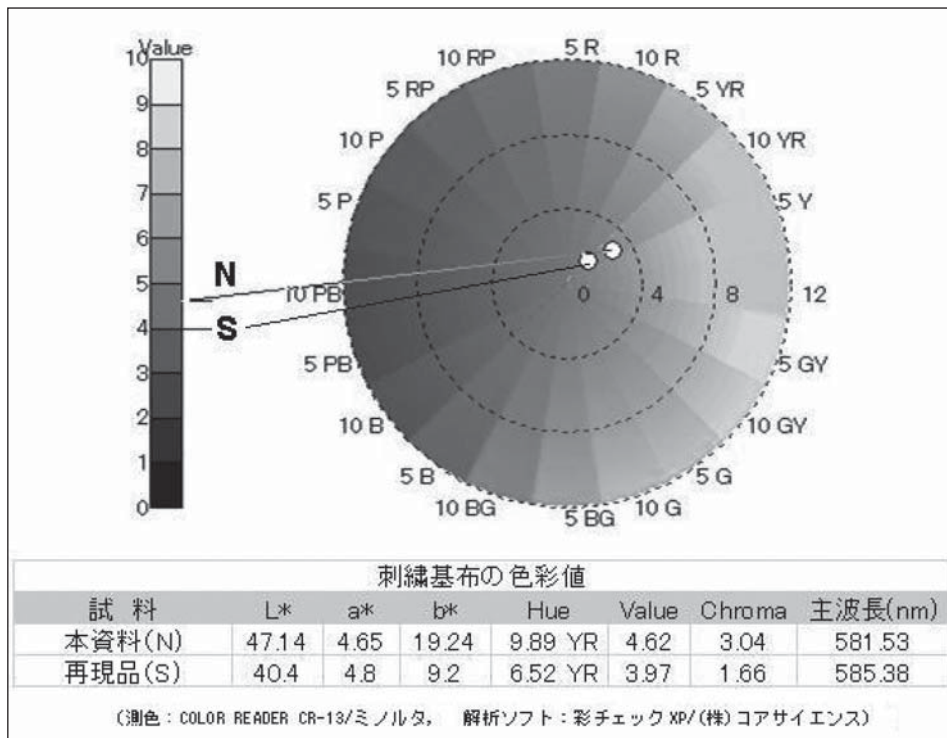


図14. 刺繍基布の色彩値と色相環（マンセルHVC）グラフ



図15. 仲村家所有刺繍大袖衣の刺繍の再現（全体）

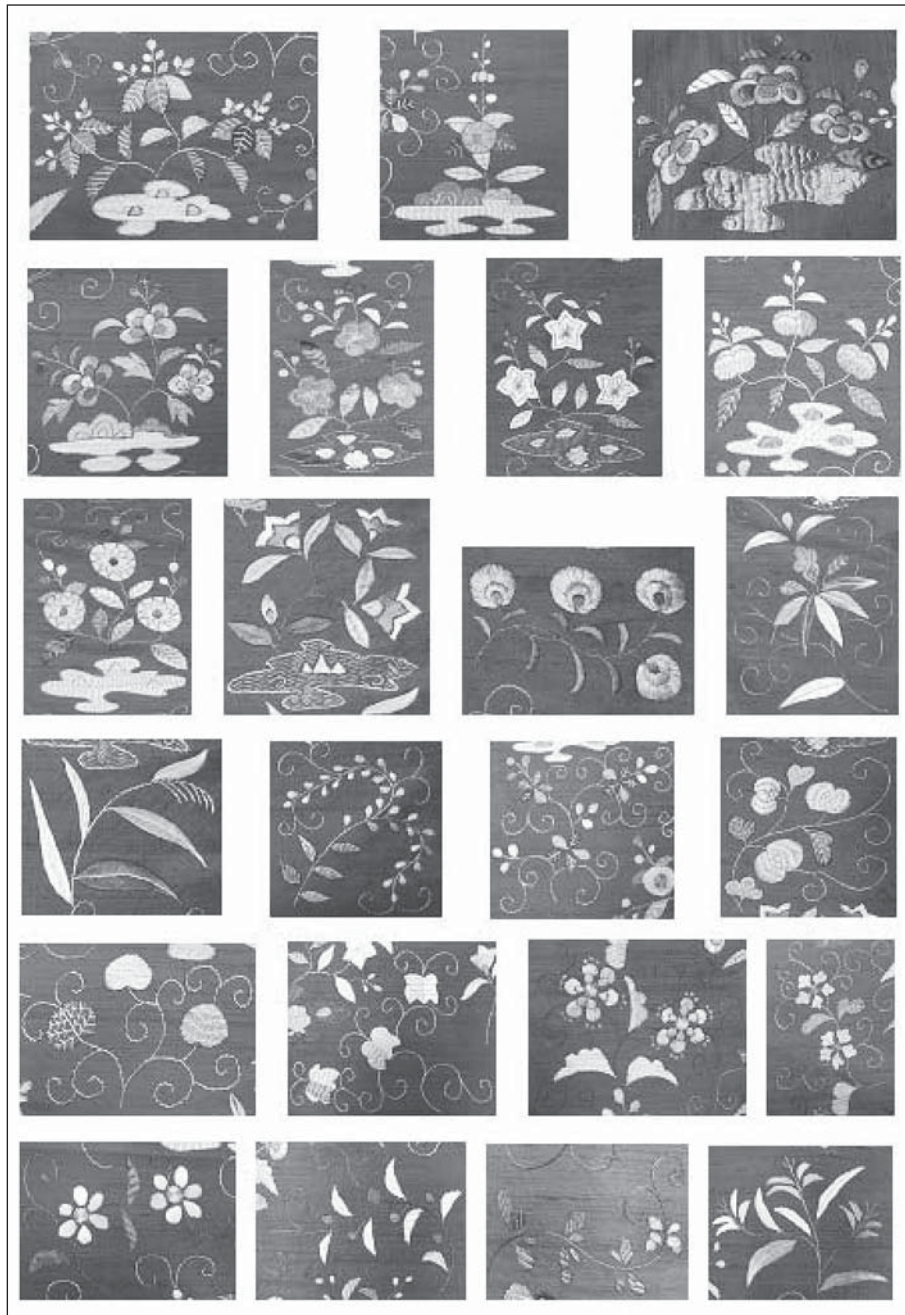


図16. 仲村家所有刺繍大袖衣の刺繍の再現（各文様部分）

刺繍針、てこ針、刺繍台などの用具は日本刺繍用のものを使い、台張り、糊付け、湯のし仕上げなども、伝統的な日本刺繍の技法に基づいて行った。刺繍は、すべて本資料の技法どおりに行うことを基本とした。本資料で図案線は残っているものの刺繍が欠損している部分については、本資料の他の部位に残されている類似の文様の刺繍と、前田家資料の実物閲覧時の記録および文献に掲載されている写真を参考にして繡った。刺繍作業は、筆者のほか、長崎市内在住の中村幸子氏、芦塚俊子氏、池角久子氏の3名で分担して行った。各氏の日本刺繍歴は長く、中村氏と芦塚氏は前述した沖縄県立博物館・美術館の「琉球神女衣装」の刺繍を分担した経験も有する。

図15に刺繍を施した裂地全体を、図16には各文様の再現刺繍部分を示す。図15は、2011年8月に琉球大学教育学部の片岡淳教授の主催で、植木氏とともに沖縄県本部町で仲村家や関係者を対象に研究成果中間報告「沖縄の服飾および染織技術」を行った際の写真である。本資料において欠損して

いる左膝と右衽下部分の刺繍については、現時点でも空白のままであり、文様の種類や配置を考察した後に再現作業を進める予定である。

3. まとめ

本報告では、沖縄本島北部の仲村家に伝世する総刺繍の大袖衣について、調査と刺繍の再現作業をとおして得た知見を述べた。すなわち、文様には24種類の植物や州浜などの吉祥文様が衣装全面に用いられ、刺繍には桃山時代に特徴的にみられる「渡し繡い」と「色がわり」の技法が用いられていた。他方、中国・明代の刺繍との類似性もみられ、日本刺繍と中国刺繍の特徴を併せ持ちながらも、文様や刺繍には模倣や曖昧さがみられた。植物と州浜を組み合わせる文様は名嘉家資料とも類似していた。仲村家所有の他の刺繍品や琉球の神女衣装に多用されている琉球千鳥繡いは、本資料には用いられていなかった。

これらのことから、本資料は制度化された琉球神女との関連性は薄いかと推察した。また、琉球千鳥繡いは三角文様を連続して形成できることから、信仰、守護、呪述性などを意匠表現する刺繍技法として用いられたのではないかと推察した。

琉球文化圏に伝世する刺繍品については、未報告・未調査の資料がある。今後も調査研究、刺繍の再現作業などを進めて、系譜や技法の特徴を明らかにしていきたい。

<謝辞>

本研究を進めるにあたり、特に、仲村正利氏、植木ちか子氏、片岡淳教授、中村幸子氏、芦塚俊子氏、池角久子氏らより多大な協力を得た。心から感謝の意を表す。

文献

- 1) 寺田貴子、植木ちか子：「琉球神女衣装の製作について」、沖縄県立博物館・美術館、博物館紀要、第2号、pp. 27-35 (2009)
- 2) 寺田貴子：「琉球文化圏に伝世する刺繍品の調査－仲村家所蔵裂－」、活水女子大学、活水論文集健康生活学部編、第53集、pp. 51-58 (2010)
- 3) 片岡淳、植木ちか子、寺田貴子：「沖縄の服飾および染織技術 研究成果中間報告書」、琉球大学 教育学部、平成22年度～平成25年度科学研究費補助金研究成果中間報告書、pp. 1-22 (2011)
- 4) 片岡淳、植木ちか子、寺田貴子：「琉球文化圏にのこる古刺繍の調査報告－本部町嘉津宇の仲村家伝世品を中心に－」、琉球大学教育学部紀要、第79集、pp. 61-75 (2011)
- 5) 「日本・中国の文様事典」、視覚デザイン研究所・編集室、視覚デザイン研究所 (2000)
- 6) 「にっぽんの刺繍－飛鳥時代から江戸時代まで－」、徳川美術館、p. 132、143、170 (1998)
- 7) 池宮正治：「琉球古語辞典 混効験集の研究」、第一書房、pp. 3-6 (1995)

<付記>

本年度のフィールド調査からの気づきを記しておきたい。仲村家の神屋中央に女神像の額絵が置かれていた。その来歴や意味について聴き取りを行いたい。沖永良部島の速水家の屋敷内に、螺鈿の原料として日本や中国への重要な輸出品であった夜光貝が半化石化して遺されているのを見た。森家との関わりも深い当家の服飾伝世品について調べたい。沖縄本島の島影は、海路、北方の与論島側から見ると「龍」が大海に横たわっている姿に似ており、龍宮伝説が頭をよぎった。南西諸島に点在する島々は、いにしへの航海者にとっては海の道のサービスエリアのようで、神女による航海安全の祈りは重大な儀式であったろうと感じた。沖縄の近海に産し、貝鈕の原料ともなる三角形の巻貝・サラサバテイの和名は、弁才天・サラサバティに由来するかと。奄美大島の瀬戸内町郷土館所蔵の、西家伝世・白糸刺繍の敷物は、広東刺繍による「マニラマントン」と思われる。